

西洋中世学会第 14 回大会 (2022 年)

自由論題報告要旨

1 井上果歩 INOUE Kaho

アルス・アンティクァ期におけるリガトゥーラの機能：理論と記譜の観点から

13 世紀はヨーロッパの音楽文化が大きな変化を迎えた時期である。一つは計量音楽の隆盛である。計量音楽とは、拍や音価（ブレヴィスやロンガ）で音の長さを計量できる教会多声音楽のことで、パリのノートル・ダム大聖堂を中心にヨーロッパ各地で演奏された。一方、それ以前よりあるグレゴリオ聖歌などの単旋律の聖歌や 2 声のオルガヌムには明確な拍や音価はなく、一種のフリーリズムで歌われたと考えられる。計量音楽という語は 13 世紀後半の理論書で登場するが、第 4 無名者（1280 年頃活躍）の証言から、おそらく 12 世紀後半から実践されていた。そして、この初期の計量音楽の時期、すなわち 1160 年～1330 年頃は、「アルス・ノヴァ」（1320 年代～1400 年頃）に対して「アルス・アンティクァ」または「長い 13 世紀」（Everist 2018: xix）と呼ばれる。

アルス・アンティクァの計量音楽の理論（以下、計量音楽論）においてとりわけ重要なのは「リガトゥーラ」（連結符）である。リガトゥーラは 1270 年頃に計量音楽論あるいは計量記譜法（音価の違いを書き分けた記譜法）が体系化される以前から、モーダル記譜法（角符ネウマとも呼ばれ、13 世紀前半に黎明か）においてモドゥス（リズム・モード）ないし何らかのリズム・パターンを表す音符として用いられてきた。そして、計量音楽論および計量記譜法では、従来のモーダル記譜法のリガトゥーラを様々に変形させて（例えば、縦線を音符の左側に付加するなど）、音の長さをより明確に示す工夫が凝らされた。興味深いことに、計量音楽論のうち最初期の資料、すなわち前フランコ式（1270～1280 年頃）の理論書を見ると、リガトゥーラの音の長さの解釈やその記譜についてそれぞれが異なる意見を述べている。一方、ケルンのフランコ『計量音楽技法』（1280 年頃）は、前フランコ式理論をもとに新たなリガトゥーラの規則や記譜を論じているが、これ以降の理論書はほぼ全てフランコが提唱するリガトゥーラの教えに従っており、アルス・ノヴァ以降もフランコの理論は引き継がれていく（Reckow 1967: 115）。

従って、本発表では、16・17 世紀まで続く計量音楽の歴史の中でも、なぜその黎明期であるアルス・アンティクァの時代にこれほどまでに集中してリガトゥーラに関する様々な議論がなされたのか、リガトゥーラが当時の音楽文化の中でどのような役割を担っていたのかを探る。より具体的には、まず、前フランコ式の理論書およびそれに準じる楽譜写本がどのようにモーダル記譜法のリガトゥーラを発展させ、またどのような記譜や規則を用いているのかを検討する。加えて、フランコがどのようにして前フランコ式のリガトゥーラの記譜と規則を改良したのか、なぜフランコのリガトゥーラの教えが急速に広まり後世で支持されたのかも考察する。

2 上遠野 翔 KATONO Sho

「神学は学知か」—ヘルヴァエウス・ナターリスによる神学の厳密化をめぐる

14 世紀初頭、ドミニコ会内のトマス・アキナスの思想の権威化の過程において、ヘルヴァエウス（ヘルヴェーウス）ナターリスをはじめとするドミニコ会神学者たちによる、同会士サン＝プルサンのドゥランドゥスに対する弾劾は、しばしば注目を集めてきた。一方で、トマスの思想に反対する立場を取ったとしてドゥランドゥスを弾劾したドミニコ会神学者たちの間でも、トマスの思想に対する解釈の違いや、トマスの思想との差異があったことが、先行研究では主張されている。トマス権威化の中心人物であったヘルヴァエウスにおいても、トマスの思想をそのままの形で受け継いだわけではないということが、様々な点において指摘されてきた。本報告は、神学という営みの捉え方そのものにおいてもヘルヴァエウスとトマスとの間で差異が見出されることに注目し、ドゥランドゥスとの対立を念頭に置きながら、ヘルヴァエウスの「神学」概念に対する基本姿勢を示すことを目指すものである。

そのために、本報告では、ヘルヴァエウスの「神学は学知か」という問題と、それに付随する問題に対する回答の仕方に注目する。彼はこの「神学は学知か」という問題に対して、『命題集註解』の二つの版と、『*Opinio de difficultatibus contra doctrinam fr. Thome*』と呼ばれる未完の著作において、それぞれ異なる回答の仕方をしている。特に、『*Opinio*』では、ドゥランドゥスが同問題を答える際に神学を三つの種類に分類していることに対する反論が、別個の問題として新たに為されている。

これらの三つのテキストを通して、ヘルヴァエウスはアリストテレス的な厳密な定義に基づく「神学は厳密には学知ではない」という立場を貫いている。一方で、三つのテキストの比較からは、彼が次第に自身のこの立場と、トマスの「神学は下屬する学知である」という立場とを両立させることを目指すようになったことが読み取れる。しかし、ドゥランドゥスへの反論において、神学を「信仰的・推論的 (*creditivus discursivus*)」なものと更に厳密に規定した結果、彼の神学の捉え方はトマスにおける「聖なる教え」よりも狭いものとなってしまったと思われる。このような神学の厳密化の過程からは、ヘルヴァエウスが神学のあり方を考える際に、どこから出発するか、何を通して結論を導くかといった方法論的な側面に重点を置いていたことが窺える。

これらのことから、ヘルヴァエウスは「神学は学知か」という問題において、トマスの主張の擁護と、ドゥランドゥス批判という課題の中で、神学の厳密化を通して、知的営みとしての神学固有の位置付けを模索していたことが示唆される。本報告を通して、トマス権威化の流れの中でのヘルヴァエウス固有の立場や、ヘルヴァエウス＝ドゥランドゥス論争の意義の一側面が提示されることが期待される。

3 大杉 千尋 OSUGI Chihiro

グリュネヴァルト〈イーゼンハイム祭壇画〉《受胎告知》について ブルゴーニュ宮廷との関連から

十六世紀ドイツの画家マティアス・グリュネヴァルト（?—一五二八年）の〈イーゼンハイム祭壇画〉（一五一二—一五一六年頃、コルマール、ウンターリンデン美術館）はいわゆるドイツ・ルネサンス期の大型多翼祭壇画の代表的作例として知られている。本作は本来コルマール近郊イーゼンハイムの町にあった聖アントニウス律修参事会（以下、アントニウス会）修道院聖堂主祭壇のために制作されたと考えられている。アントニウス会は「聖なる火」あるいは「聖アントニウスの火」と称された麦角中毒の患者を治療するための専門の修道会であり、患者たちはこの祭壇画の前で祈りを捧げ救済を祈ったと考えられている。

本祭壇画は三つの面から構成されており、そのうち第二面の左翼にあたる《受胎告知》には従来看過されてきたモチーフが存在する。それは、聖母マリアの衣の裾が彼女が読んでいる本の下に挟み込まれているというモチーフである。このような細部はデューラーの《小受難伝》の他、グリュネヴァルトと同じドイツ語圏の受胎告知図には見いだすことができない。しかし一方で、フランス語圏の芸術においては写本装飾やヤン・ファン・エイクのワシントン・ナショナル・ギャラリーに所蔵される《受胎告知》などこのモチーフが数多く登場する。

発表者はグリュネヴァルトの《受胎告知》が聖堂を思わせる建造物を背景として描かれていることも考慮し、本作品の視覚的着想源がブルゴーニュ宮廷の芸術にあると考える。

従来注文主と目されてきた修道院長ジャン・ドルリエはサヴォワ出身であり、教皇庁とも結びつきを強めたほかブルゴーニュ宮廷との密接な関係を保っていた。例えば、一四六九年にイーゼンハイム近郊の街エンシスハイムに侵攻してきたブルゴーニュ公国は出先機関を同地に置いたが、その機関の評議委員にドルリエは名を連ねている。また、彼はフィリップ善良公の侍従クロード・ド・トゥーロンジェオンとも親交があった。

グリュネヴァルトがドイツ語圏の画家であること、次代の修道院長で祭壇画制作に引き続き関わったと思われるギ・ゲールの出自がイタリアであると思われていたことなどから、先行研究では《イーゼンハイム祭壇画》とフランス語圏の芸術との関連は十分に論じられてこなかった。今回本祭壇画とフランス語圏、特にブルゴーニュ公国の美術との関わりに改めて焦点を当てることで、《イーゼンハイム祭壇画》の視覚的着想源について新たな観点から解釈を加えたい。

4 白川 太郎 SHIRAKAWA Taro

過ぎ去らない中世

近代イタリア王国の知識人による宗教史叙述と「異端者」の再発見

16世紀以降、ヨーロッパの知識人たちは古典古代の終焉にはじまる約一千年間を「中世」と名付け、その歴史にさまざまな同時代的関心を投影してきた。「中世」は、理想視される場合にも、暗黒時代として否定される場合にも、規範を示す記号として用いられてきた。特に19世紀に入ると「中世」の想像・構築・利用は各国で加速し、その内実・性格や同時代との関係をめぐる論争が加熱した。生まれつつある近代歴史学による中世研究はこの論争と無縁ではいられなかった。

19世紀のイタリア半島は、この「中世」観をめぐる論争のひとつの中心であった。フランス革命軍の侵入によって既存の知的・政治的枠組が大きく動揺すると、多くの知識人たちが「中世」の都市共和国やキリスト教文化に新たな範を求め、議論を闘わせた。他方で1861年に成立したサヴォイア家のイタリア王国とその政府は、国民形成／統合を推進する上で「中世」から離れ、古代ローマ帝国の「伝統」を重点的に活用した。しかし、各地の美術館・博物館や郷土史協会、祝祭や儀式、そして制度化されていく歴史学の場においては、統一以後にも「中世」が大きな存在感を発揮し続けていた。

本報告では、統一以後のイタリアにおける中世研究において「異端者」という主題が再発見され、キリスト教史叙述の中心に位置づけられていく過程を、知識人たちの同時代的な関心に沿って分析する。具体的な事例として、反教権主義に対抗してローマ教会の「正統」を擁護した歴史家チェーザレ・カントゥ（1804-1895）、中世の「異端者」の中に「近代的」諸価値を見出そうとした哲学者・考証学者フェリーチェ・トッコ（1845-1911）、イタリア国民の「プロテスタント的」性格を証明しようとしたヴァルド派牧師・歴史家エミーリオ・コンバ（1839-1904）を取り上げる。支配的価値への反抗者とされた「異端者」たちは19世紀後半の政治的・思想的対立の焦点となり、その評価や位置づけをめぐる競合にもかかわらず、各々の「中世」にとって中心的位置を占めたのである。

さらに、本報告では、これらの歴史家・知識人の歴史叙述、特に自身「異端者」の末裔であったコンバのそれが、実際に中近世から継承されてきた知的枠組の転用・再編という性格を持つことを指摘する。研究対象である「異端者」たちの救済史理解は、知識人たちのキリスト教史叙述にとっても規範だった。この事実は、歴史的中世と史学的「中世」の関係が後者による前者の構築・利用には留まらない一面を有したことを示唆していよう。

本報告で取り上げる歴史家たちの著作や史料校訂作業は、イタリア史学における「異端者」研究の基盤を整備したのみならず、後世に引き継がれる分析概念や枠組をも作り上げた。近年の「異端者」研究の進展は著しく、その創始者たちの問題意識は過去のものになったかに見える。しかし、その歴史叙述の枠組はカトリック近代主義者たちによって継承され、20世紀のイタリア中世宗教史研究にも大きな影響を与えていた。彼らの業績の再検証は、イタリア史学史のみならず、中世宗教史研究者にとって不可欠の知見を提供すると期待できよう。

5 Mitchell Simpson

Irish and Muslim Contact in Otherworld Narratives: W(h)ither the Boundaries

In this paper, I explore the striking similarity between *The Book of Muhammad's Ladder*, a twelfth century French translation of an ostensibly Al-Andalusi text, and the roughly contemporary Irish text *Aislinge Meic Con Glinne*. In both narratives, the protagonists are transported to an Otherworld by an angel, and they relate their otherworldly experiences of abundance and splendor to companions, kings, and demons. *Aislinge Meic Con Glinne* fits squarely in the insular genre of Otherworld narratives, which was the focus of Aisling Byrne's aptly titled *Otherworlds* (OUP, 2016). Byrne, however, only briefly mentions the *Aislinge* and *The Book of Muhammad's Ladder* not at all, though it too largely fits within the Otherworld genre and is itself probably of British provenance. Dorothee Metlitzki suggests that *The Book of Muhammad's Ladder* may be the inspiration for various insular Otherworld narratives in her 1977 monograph, *The Matter of Araby in Medieval England* (Yale University Press), but Byrne's study about the endemic tradition of Otherworld narratives casts some doubt on Metlitzki's conclusions. Regardless, *The Book of Muhammad's Ladder* is rarely put into conversation with other similar insular texts. This is an oversight because the two works, *Aislinge Meic Con Glinne* and *The Book of Muhammad's Ladder*, both appear to influence the Hiberno-English satirical lyric, *The Land of Cokaygne*, suggesting they ought to be read in light of each other.

Celtic literatures are too often treated in isolation as particularly visionary and mythopoetic in comparison to their sober English and other European neighbors (cf. Patrick Sims-Williams). And yet, as Keith Busby observes in *French in Medieval Ireland, Ireland in Medieval French* (Brepols, 2017), the Irish certainly saw themselves in a wider European context even before their independence was wrested away by Norman conquerors. This study further contributes to an understanding of the Irish with the multilingual, multicultural milieu that they participated within during the European Middle Ages. Furthermore, by putting *The Book of Muhammad's Ladder* in conversation with other texts in the insular Otherworld genre, I show that its authors used the genre as part of the text's polemic, especially considering the degree to which the French departs from its apparent Arabic source *Kitab al-Miraj*. That is, *The Book of Muhammad's Ladder* does not merely share similarities with *Aislinge Meic Con Glinne* but rather employs motifs shared across the Otherworld genre as Byrne describes the genre, such as with *The Purgatory of St. Patrick*, marking it as a particular kind of imaginative field. The fictive (rather than historical) Muhammad appears to then be a man dazzled by fantasy who wishes to lead his companions further into it, whereas Aneir, the protagonist of *Aislinge Meic Con Glinne*, is able to escape fantasy's snares and employs it for real sociopolitical ends. In sum, this study tests the direction of influence and sets rarely paired texts in conversation together to illuminate an under researched corner of Medieval British literary culture.